



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

# NEWS LETTER

特集

## 壁画をめぐる物語

vol. **34** | 季刊 2015 冬



# CONTENTS

INAXライブミュージアム  
NEWS LETTER

vol.34 | 季刊 冬  
2015

表紙写真

子どもたちが「光るどろだんご」をつくっている間、企画展「雨と生きる住まい」を見学するお母さんたち(三重県四日市市から)。土壁に、雨にまつわる文学作品が投影されています。(2014.11.16)

撮影:加藤弘一

## 01 [特集] 壁画をめぐる物語

小さな図書館を飾る北川次次の壁画(瀬戸市)  
若手造形集団が生み出した斬新な陶壁(常滑市)  
知多半島の陶壁  
パブリックアートとしての壁画、その変遷

### LIVE SCHEDULE

- 06 好評開催中  
企画展 雨と生きる住まい—環境を調節する日本の知恵
- 07 企画展 壁のパブリックアート

### LIVE REPORT

- 06 開催報告  
企画展 オープニングセミナー&内覧会  
雨仕舞の知恵—寺社建築と民家づくり
- 08 光るどろだんご全国大会 2014  
陶と灯の日
- 09 現在進行中!  
新常滑市民病院 エントランス壁画(タイルアート)プロジェクト  
フィンランドからサンタクロースがやってくる!



左/楽遊館、右/丸久旅館

### 常滑から\*

33

## 最近、常滑からなくなったもの

最近、常滑から姿を消した残念なものが二つある。

一つは、駅前で大正時代から続いた老舗の「丸久旅館」。常滑の土管産業の盛衰を見守ってきた瀟洒な黒壁の木造建物は、宿泊客だけでなく観光客からも人気を集めた。解体される噂は聞いていたが、気づいた時には影もかたちもなくなっていた。

二つめは、今夏で閉館した小倉町の「楽遊館」である。「楽遊館」は、当時足袋を製造していたマツヤ産業の別邸で、昭和初期の和洋折衷建築である。その折衷具合が変わっている。玄関のある建物の正面半分は洋風建築、庭に面した半分は純和風の造り。この建築を地域の文化拠点に仕立てたのが、デザイナーでアーティストの岡康正氏である。四季折々にユニークな演奏会や講演会、展覧会が催され、岡氏のミュージック作品も発表された。何より、ご亭主の人懐っこい笑顔と温かい人柄に惹かれ、おしやべりを楽しみに足を運ぶ人も多かっただろう。私も、その一人だ。一風変わった建築にはまだお目にかかれるが、あの「楽遊館」の賑わい、ご亭主の笑顔がここになくしては、寂しき心こころ。

いつまでも心に残しておきたい、常滑の記憶である。

尾之内 明美 (広報担当)

\* INAXが生まれ育った常滑のやきものや土に関わる人、風景、できごとなどを、INAXライブミュージアムのスタッフが伝えます。



丸栄(名古屋市中区)。設計は村野藤吾。百貨店で唯一の日本建築学会賞を受賞している。エスカレーターの設置や斬新なディスプレイでも注目を集めた。  
\*村野藤吾(1891-1998)時代の潮流だったモダニズムから一定の距離をおき、人の感性や手仕事を重視して独自の作風を確立。迎賓館(旧赤坂離宮改修、国宝)など、日本現代建築に多大な功績を残した。

[特集]

# 壁 Hekiga めぐる物語

建物を飾る壁画は、それが生まれた時代を語ってくれます。名古屋の真ん中にあるこの大壁画は、1953(昭和28)年に新装開店した百貨店、丸栄。店舗設計は、日本を代表する建築家・村野藤吾\*。高度成長を迎える日本経済を予見しているかのような華やかさです。特集では、1970年代初期に陶磁器の一大生産地・瀬戸と常滑で制作された壁画を取り上げ、その物語を探りました。さらに、知多半島にある陶製の壁画を訪ねます。

# 小さな図書館を飾る 北川民次の壁画

1970(昭和45)年に市制40周年を記念して建設された瀬戸市立図書館には、北川民次画伯(1894-1989)の陶板壁画があります。瀬戸で「図書館」といえば、だれもがこの壁画を思い浮かべます。有名な陶芸作家がたくさんいる瀬戸で、なぜ北川民次なのか。

「そこには、彼の思想があります。強烈な個性とカリスマ性を持つ民次が、瀬戸で果たした役割は非常に大きい」と、瀬戸市美術館館長の服部文孝さんは話します。

北川民次は、戦時下の1943(昭和18)年に東京から瀬戸市に疎開。以来、亡くなるまで、窯業の街・瀬戸とそこで働く人々を愛し、瀬戸で創作活動を続けました。

1923(大正12)年にニューヨークからメキシコに渡り、そこで取り組んだ児童美術教育の実践は、瀬戸の地でも教師たちと精力的に続けられました。また、陶芸の街に絵画という新たな息吹をもたらした、陶芸作家も含めて、作家たちが切磋琢磨して良い芸術を生み出していく原動力になりました。



瀬戸市立図書館の陶板壁画  
『無知と英知』『勉学』『知識の勝利』  
(原画・制作指導/北川民次)



民次は、1920年から1930年代にかけてメキシコで起こった壁画運動にも参加しています。これは、メキシコ革命の意義やメキシコ人のアイデンティティを、誰でもいつでも見ることでできる壁画で民衆に伝えようという運動です。「図書館」という建物を飾る壁画に、北川民次の絵画はいかにもふさわしいものでした。

「民次の絵画には人間や愛といったテーマのものが多く、優しさを感じます」と、服部さん。図書館の外壁や内部の壁の絵からは、今も、北川民次が瀬戸の人々にあてた強いメッセージを受け取ることができます。



市民や観光客が集まる複合施設「瀬戸蔵」の壁面に保存されているタイル・モザイク壁画『陶土の山と探掘夫』『ロク工場風景』『登り窯』(原画/北川民次)旧市民会館(1959年建設)が取り壊される際、市民からホール壁面の保存運動が起き、移築保存されることになった。瀬戸を愛した民次は、瀬戸市民からも愛された。

# 若手造形集団が生み出した 斬新な陶壁

常滑市立常滑西小学校体育館の壁面。子どもたちの笑顔が飛び出してくる躍動感あふれるタイル壁画です。1971(昭和46)年、木造体育館を改築するに際し、常滑市はその陶壁の作成を若手の作家たち約20名からなる「常滑造形集団」に依頼しました。

メンバーは内部でコンペを実施し、写真をそのまま陶壁に再現する案に決定しました。実際に海岸で遊ぶ子どもたちの写真を撮り、その画像を写真印刷の要領でアミ点に分解し、一つひとつを5cm四方の立体タイルで置きかえるという実験的なアイデアでした。正面はもちろん、どこから見ても一つの絵になるように、タイルの形や彩色する部分に工夫を重ね、約10カ月かけて完成したものです。

当時の常滑の街は、前年の大阪万博を体験して、熱いエネルギーがみなぎっていました。万博に採用されたのは、「月の椅子」と命名した抽象彫刻のような大きい陶製ベンチ100個。万博の刺激とその高評価をきっかけに、制作にあ



右側から見ても、左側から見ても、一枚の絵に見える。右/使われているのは4万5千個のタイル。台形型タイルの底辺は一辺5cm、高さは4cm、上底辺はまちまち。彩色面もいろいろだ。



たった若手作家を中心に結成されたのが「常滑造形集団」です。若手作家たちは競い合い、協力し合いながら、新しい文化や技法を貪欲に習得し、独自の道を切り開こうとしていました。それを、先輩の作家たちや行政が支援していく。この壁画は、そういう一連の街の動きから生まれました。「それ以後、常滑でも、伝統陶芸だけでなく、前衛陶芸の分野が盛んになりました。陶芸の幅を広げた時代だと言えるでしょう」と、常滑市民俗資料館元館長の中野晴久さんは当時を振り返ります。



現在は国内外で活躍している作家が多数参加していた。(写真提供/大崎保利)



中部国際空港 1階ロビー正面  
「The water of life」  
吉川正道 (2005年)

知多市勤労文化会館  
「希望の朝」  
加藤 鈞 (1984年)



東海市立文化センター  
「楽園」鈴木青々 (1980年)

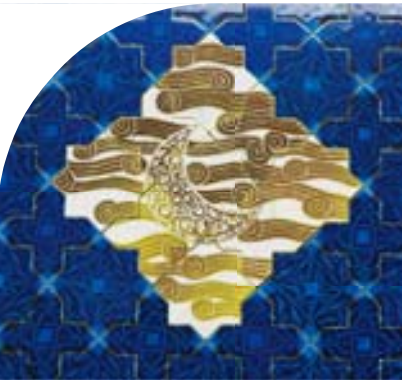
東海市立勤労センター  
「空あけて」  
河本五郎 (1982年)

半田市福祉文化会館  
「交響」加藤卓男 (1987年)

半田市立博物館  
「未来へのはばたき」  
加藤 鈞 (1984年)



半田商工会議所  
「彩映歌歌」  
加藤卓男 (1983年)



## パブリックアートとしての壁画、その変遷

瀬口 哲夫  
名古屋大学  
名誉教授



1

945(昭和20)年、戦後の建築の復興は、まず住宅から始まります。それから数年を経て、新しい建築が建ち始める。前川國男、谷口吉郎、坂倉準三、丹下健三といった当時の建築家たちは、ル・コルビュジエ(1887-1965)の影響を強く受け、機能主義のモダニズム建築を標榜します。コルビュジエの建築を見るとわかりますが、ポイントとして壁画や絵画が入っています。モダニズム建築は装飾を否定したと言われ、実は、そうではなかった。日本の建築家もその影響を受けて、戦後復興期の建築の多くに、陶壁や彫刻があしらわれています。

その一方で、美術界の流れがあります。戦後の美術は、変わり始めた日本社会へ積極的にかわろうとする動きが活発で、熱気にあふれていたのでしょう。「美術館のだけが美術じゃない」という意識が生まれ、岡本太郎をはじめとする数々の作家が陶壁の制作に挑戦し、パブリックアートの概念が広がっていきます。経済的にも時代の産物であったのです。

さらに時代が進み、昭和50年代後半から60年頃、経済大国になった日本で、「景観」ということが意識され始めます。その先駆けは、横浜市や神戸市。都市景観整備を積極的に進めて、魅力ある都市空間をつくる。その流れが全国の自治体に波及していきます。そこに導入されたのが「文化の1%システム」です。公共建築をつくる際に、総工費の約1%を芸術的な用途に充てるというもので、「地方の時代」とも相まって、文化行政の取り組みとして展開されていきました。ですからホールや、福祉会館などに、彫刻や絵画などの芸術作品が設置されていったのです。

現代の陶壁は、より建築に寄り添い、デザインのひとつとして制作されているような気がします。かろやかな空間の中には、かろやかな作品。空間を構成するものとして考えられているのでしょうか。

長い年月の中で、建築も、芸術も、少しずつ変わっていく。建築家も作家も新しい表現へ向かう。だからこそ「当時のもの」は貴重なんです。陶壁だって、もう同じものはありません。(談)